

私の出会った

小島ゆかり

歌人

小島ゆかりの第三歌集『ヘブライ暦』が、今年の河野愛子賞に決まった。ファンの一として心から祝福したい。

彼女のファンは多い。第一歌集『水陽炎』のみずみずしい端正な抒情、第二歌集『月光公園』の鋭い感覚の追求、そして『ヘブライ暦』のアメリカの風土に向かった、生活者であり詩人である存在の静かな迫力と、それぞれに味わいの異なる歩みを見せて、コスモスの先輩の高野公彦たかの きみひこともちがう独特の宇宙を創っている。

それに、お会いになった方は誰もご存じだろうが、彼女は魅力あふれる美しい人である。歌を読めば二人のお子さんがいることはわかるが、顔を見るととても信じられない。年下の私から見ても、可愛いという感じなのだ。



小島ゆかり

水原紫苑

初めて小島ゆかりと対面した時は何年前だったろうか。いつも歌だけを読んで凄いと

思、会いたいと願っていたのだが、彼女はお子さんが小さくて会合などには出て来なかった。なかなか会うことができなかつたので、なかなか会うことができなかった。

そんな頃、「水の会」という若手女性歌人の勉強会が始まり、私も声をかけられて新宿の喫茶店に行った。遅れて着いてみんなをさがすと、私を見てにこにこ笑っている小島ゆかりがいた。写真にそっくりだと思ひ、何かとても楽しくなった。

彼女はお客様も「コスモス」の歌人である。独特の感性もお母様ゆずりなのだろうか。

小島ゆかりの世界では、私たちを取り囲む日常の事物がひとつひとつ新しい顔を見せる。こんなに感覚を全開にしている、生活に支障をきたすのではないかと思えるほどだ。

でも、話している時には少しも神経質そうではなく、のんびりおっとりして明るいのがまた面白い。繊細なうたを詠む人が青白くひきつった表情をしているのでは、意外性が無いだろう。小島さんの会話は、特に冗談を言うわけでもないのに笑いが絶えない。

短歌のことを話す時、いつも感心するのは、はっきりと自分の意見を述べてためらわれない率直さである。世評に決して惑わされずに、一首を一首としての確に読む人なのだ。

評論もいいが、「棧橋」に連載しているエッセイは、どこかがふわっと抜けていて異界へ誘い込まれそうな魅力がある。椎の実や納豆や食パンといった何でも無い素材から、くらくらするようなあやうい物語を引き出して来るのである。

小島ゆかりはこれからどんな道を歩いてゆくのだろうか。過去の女性歌人の誰ともちがう不思議な個性が、また次の歌集で新たな顔を見せてくれるだろうと思うと楽しみだ。

小島さん、今度ゆっくり、二人でお酒でも飲みましょう。

(みずはら・しおん 「中部短歌」所属・

「NHK歌壇」番組進行役)